

女性非正規雇用者の生活実態を探る
—ケイパビリティ・アプローチを用いた検討—

山 本 咲 子*

Exploring Living Conditions of Unmarried Non-regular Female
Workers Based on the Capability Approach

YAMAMOTO Sakiko

Abstract

As a new perspective on Quality of Life, the Capability approach by Amartya Sen and Martha Nussbaum have continued to come into prominence in recent years. The aims of this study are (1) selecting specific functions for unmarried non-regular female workers based on Martha Nussbaum's "Central Human Functional Capability List" and (2) clarifying their actual conditions through the selection of these functions. Nussbaum is a philosopher and a joint researcher of Sen's capability approach. This study's findings draw on a brain storming method. Our sample is 11 unmarried non-regular female workers. The results were as follows (1) we discovered a new item called "information gathering". In an information society, the quality of life depends on how one acquires information. It is effective and appropriate for our participants to have added this item to the list. (2) The numbers of times each functioning was indicated necessary by participants varied. While 'Bodily Health' and 'Affiliation' were mentioned many times, 'Emotions', and 'Other Species' were not mentioned at all. We can conclude that participants might have difficulties with realization of those functionings.

Keywords : Capability Approach, Martha, Nussbaum, Central Human Functional Capability List, Functionings, Non-regular female workers

1. はじめに

非正規雇用の増加は現代日本の重要な労働問題の一つである。労働力調査（総務省統計局 2018）によると、労働者全体（5,460万人）の37.3%は非正規雇用者である。非正規雇用者の性別をみると、男性は31.8%、女性は68.2%であり、非正規雇用は女性に大きく偏っていることがわかる。非正規雇用の問題点の一つとして、単身世帯として生計を立てられないほどの低賃金であるということがあげられる。女性の非正規雇用者の平均年収の分布を見ると、100万円未満が44.3%、100～199万円未満が38.8%である。83.1%の女性が年収199万円未満に留まっており、300万円以上は4.4%に過ぎない。年収199万円未満では、生活に困難が生じるであろう。

現在の社会科学領域では、人々の生活の質を捉える方法として、満足度調査が普及している。世論調査（内閣府 2012,2018）によると、女性は男性より生活満足度が高いと認識されている。女性の貧困が問題視されようになって久しいが、女性の生活満足度が男性よりも高いという結果は、真に彼女たちの生活の質を表している

キーワード：ケイパビリティ・アプローチ、マーサ・ヌスバウム、人間の中心的なケイパビリティのリスト、機能、女性非正規雇用者

*平成27年度生 ジェンダー学際研究専攻

いえるのだろうか。先述したように、女性非正規雇用者の8割強が年収199万円未満である現実を考えれば、彼女たちが一人で自立した生活を送ることができているとは思えず、生活満足度が高いことと生活の質が高いことは同義ではないと考える。

従って一般的に普及した生活満足度調査から生活の質を図ろうとする方法では、女性非正規雇用者の生活実態を明らかにすることは難しいと考えた。そこで本研究では満足度ではなく、生活の質を人々の行動や在り方で分析するケイパビリティ・アプローチ（以下、CA）を用いて、未婚の女性非正規雇用者の生活実態を明らかにする。

2. ケイパビリティ・アプローチの応用方法

近年、生活の質の新たな捉え方としてアマルティア・センが提唱したCAが注目を集めている。センは共同研究者のマーサ・ヌスバウムらと共に、満足度を生活の質を測る尺度とする効用主義への批判などからCAを発展させた。CAには機能（functionings）という重要な概念がある。機能とは、個人が暮らす環境において、金銭などの資源を利用して実現できる行動（doing）や在り方（being）のことである。CAでは、人の生活は様々な機能の集合であると捉え、この機能の集合体をケイパビリティと呼び、ケイパビリティから人々の生活の質の把握を試みる（セン 1999）。

センは、CAの概念については詳細に説明をするが、CAを実用化するための分析枠組みは提供していない。よって、CAを用いて研究を行う場合、研究内容に適合した調査方法を研究者自身が設計する必要がある。Robeyns (2003) や石田 (2014) は、CAを調査に応用する一つの可能性として、ケイパビリティのリストを使用する方法をあげている。Robeyns (2003)、Williams and Windebank (2003)、後藤等 (2004)、天野・粕谷 (2008) の研究は、研究対象者の生活に必要なケイパビリティの基準を示したリストを用いて、生活実態を明らかにする調査・分析を行っている。

以下、ケイパビリティのリストを使用することに対するセンとヌスバウムの考え方の違いを示す。センとヌスバウムのCAに関する議論は概ね合致しているが、一点だけ決定的な違いがある。ヌスバウムは人々の生活の質を測る際にケイパビリティのリストを使用することの重要性を認識し自身が考案したケイパビリティのリストを提示する一方で、センはリストを用いることに消極的である。セン (2004) は、特定のケイパビリティのリストを定めることによって、そのリストから外れた機能に関する議論や判断の機会が奪われる可能性があるという理由からリストを提示しないが、ケイパビリティのリストを用いることに反対はしておらず、CAの不完全性を取り除くためにはリストが必要であることを認めている。

ヌスバウムは、CAを人々の福祉や生活の質の比較を行うための最善の方法であるとする。更に、社会が保障すべき最低限の福祉水準とはどのようなものかを示す社会正義の理論の構築の必要性から10項目で構成される「人間の中心的なケイパビリティのリスト」（以下、「ヌスバウムのリスト」）を提示している（ヌスバウム 2005）。各項目の内容を表1に示す。

天野・粕谷 (2008) は、「ヌスバウムのリスト」は基本的な権擁護の視点が可視化されており、DVや虐待といった問題を項目に含めているため、女性を対象とした調査において他の指標よりも優れていると指摘している。

「ヌスバウムのリスト」は、世界のどの地域に暮らす人々にも当てはまる普遍的なものとして提示されており、そのため抽象度も高い。したがって、個々の生活環境によってケイパビリティを構成する機能は異なるため、「ヌスバウムのリスト」を研究に用いる際には、研究対象者の暮らす生活に適応した具体的な機能で構成されるリストを用いる必要がある。セン (2006: 60) は、それぞれのケースで考慮すべき重要な機能のリストを作るためには機能の選定作業が必要となり、その選定作業には常に評価の問題が発生するが、機能の重要さの判断には、その機能の達成に対する関心や価値に注目することが大切であると述べている。

「ヌスバウムのリスト」以外にもErikson and Rune (1987)、Alkire and Black (1997)、Robeyns (2003) など生活を評価する基準となるリストは複数存在するが、それらのリストに基づき具体的な機能を選定する研究はWilliams and Windebank (2003) と後藤等 (2004) の二つしか見いだせなかった¹。CAを用いて女性非正規雇用者の生活の質を測り、その実態を明らかにしようとする研究は過去に前例がない。以上を背景として、非正規雇用者の生活実態を明らかにすることは、日本の労働問題を解決するために意義があると考えられる。

表1 ヌスバウムによる人間の中心的なケイパビリティのリスト

項目	内容	
1 生命	正常な長さの人生を最後まで全うできること。	
2 身体的健康	健康であること。(リプロダクティブ・ヘルスを含む)	
	適切な栄養を摂取できること。	
	適切な住居に住めること。	
3 身体的保全	自由に移動できること。	
	主権者として扱われる身体的境界を持つこと。 つまり、性的暴力、子どもに対する性的虐待、家庭内暴力を含む恐れがないこと。	
	性的満足のおよび生殖に関する事項の選択の機会を持つこと。	
4 感覚・想像力・思考	これらの感覚が使えること。想像し、考え、判断が下せること。	
	読み書きや基礎的な数学的科学的訓練を含む適切な教育によって養われた“真に人間的な”方法でこれらのことができること。	
	自己の選択や宗教・文学・音楽などの自己表現の作品や活動を行うに際して想像力と思考力を働かせること。	
	政治や芸術の分野での表現の自由と信仰の自由の保障により護られた形で想像力を用いることができること。	
	自分自身のやり方で人生の究極の意味を追求できること。 楽しい経験をし、不必要な痛みを避けられること。	
5 感情	自分自身の周りの物や人に対して愛情を持てること。	
	私たちが愛し世話してくれる人々を愛せること。	
	そのような人がいなくなることを嘆くことができること。	
	愛せること、嘆けること、切望や感謝や正当な怒りを経験できること。	
	極度の恐怖や不安によってあるいは虐待や無視やトラウマとなって人の感情的発達を妨げられることがないこと。	
6 実践理性	良き生活の構想を形作り、人生計画について批判的に熟考することができること。	
7 連帯	A	他の人々と一緒に、そしてそれらの人々のために生きることができること。
		他の人々を受け入れ、関心を示すことができること。
		他の人の立場を想像でき、その立場に同情できること。
	B	正義と友情の双方に対するケイパビリティを持てること。
		自尊心を持ち屈辱を受けることのない社会的基盤を持つこと。
		他の人々と等しい価値を持つ尊厳のある存在として扱われること。 労働については、人間らしく働くことができること。実践理性を行使し、他の労働者と相互に認め合う意味のある関係を結ぶことができること。
8 自然との共生	動物、植物、自然界に関心を持ち、それらと関わって生きること。	
9 遊び	笑い、遊び、レクリエーション活動を楽しめること。	
10 環境のコントロール	政治的	自分の生活を左右する政治的選択に効果的に参加できること。
		政治的参加の権利を持つこと。
		言論と結社の自由が護られること。
	物質的	形式的のみならず真の機会という意味でも(土地と動産の双方の)資産を持つこと。
		他の人々と対等の財産権を持つこと。
		他の人と同じ基礎に立って、雇用を求める権利を持つこと。 不当な搜索や押収から自由であること。

出所：ヌスバウム (2005:92-95) より筆者作成

3. 研究目的と方法

(1) 研究目的

本稿の目的は、第一に、ヌスパウムのケイパビリティのリストを基準とし、未婚の女性非正規雇用者のケイパビリティを構成する具体的な機能を選定することである。第二に、選定した機能から見えてくる彼女たちの生活実態を明らかにすることである。

(2) 研究対象者

研究対象者は未婚の女性非正規雇用者である。スノーボールサンプリングを用いて募集し11名から協力を得た。ブレインストーミングを実施するために、11名を5名、6名の二つのグループに分けた。調査時期は2014年7月、実施時間は2時間であった。非正規雇用者の定義は中野（2007：53）の「労働契約上は、①通常の労働者よりも短時間で働く、②期間の定めにおいて働く、③労務提供先とは直接の労働契約関係にはない間接雇用で働く、という3つの要素の一つまたは複数の組み合わせを特徴としている」を採用し、上記①～③の一つでも該当する人を対象者とした。対象者を未婚者に限定した理由は、女性の場合は、既婚者は家事育児に費やす時間が多いと想定し、既婚者と未婚者では生活状況に違いがあり、共通した生活環境で暮らす人物を対象者とする意図があったためである。対象者たちは東京都内に在住しており生活環境は共通している。

研究対象者11名のプロフィールについて、年代は20代が4名、30代が4名、40代が2名、無回答が1名であった。最終学歴は高卒が1名、短大/高専卒が1名、専門学校卒が3名、大学卒が6名であった。年収は200万円未満が2名、200～300万円が5名、300～400万円2名、400～500万円が1名、無回答が1名であった。年収300～400万円の1名と、年収400～500万円の1名の計2名は仕事を兼業しており、兼業の仕事も非正規雇用であった。同居者の有無は、ありが8名、なしが3名であった。対象者のプロフィールを表2に示す。

表2 調査対象者のプロフィール

	年代	最終学歴	年収	兼業	同居者
A	40代	短大/高専卒	200～300万円	なし	なし
B	20代	専門学校卒	200～300万円	なし	なし
C	20代	専門学校卒	200～300万円	なし	あり
D	30代	大学卒	200～300万円	なし	あり
E	30代	大学卒	200～300万円	なし	あり
F	20代	大学卒	200万円未満	なし	あり
G	40代	専門学校卒	300～400万円	なし	なし
H	無回答	大学卒	200万未満	なし	あり
I	20代	大学卒	無回答	なし	あり
J	30代	高卒	400～500万円	あり	あり
K	30代	大学卒	300～400万円	あり	あり

(3) 研究方法

機能の選定にあたり、ワークショップの形式のブレインストーミング法を採用した。Robeyns（2003：87）はCA研究においてリストの使用の有効性を主張したが、妥当なリストを作成するためには、強制されないブレインストーミングを行うことが必要であると述べている。

ブレインストーミング法とは、オズボーン,A（1987）が考案した創造性開発のための技法である。日本では、看護学や介護福祉学領域で問題解決を図る先行研究（西垣等 2014、汲田 2012）がある。ブレインストーミング法の利点は、テーマを参加者が主体的に把握することができ、他のメンバーの考えを尊重することで思いもかけなかった新しい発想を発見することができることである（西垣等 2014）。

ブレインストーミングのテーマは対象者である未婚の女性非正規雇用者が「生活していくのに必要と思われる

行動（機能）とその理由」とした。なぜならば、本調査に先立ちパイロットスタディをした結果、なぜその機能が必要なのかという理由を確認する必要性が認められたからである。当事者が語る機能の必要性まで調査結果に反映させることは、人々の意思決定を尊重するCAの実践方法として相応しいと考えた。

調査の具体的な手順は、2013年に日本家政学会生活経営学部会がCAを用いた機能を抽出する方法（重川・久保 2014）に従い、個人ワーク、次にグループワークを行った。個人ワークでは、生活に必要な機能とその理由を、一つの機能につき1枚の付箋に記入するように依頼した。機能は「～する」という動詞の形で書き、同じ機能でも、それを行う理由が異なれば、それぞれ理由を1枚ずつ書くように依頼した。思いつく限り書き出してもらう個人ワークを20分間行なった。

個人ワークの後、参加者同士で付箋に書いた内容を発表するグループワークを実施した。付箋を模造紙に貼りながら、意見を共有する作業を30分間行なった。他者の意見を聞いて更に思い出したり、自分もそれが必要だと思った場合には、付箋を書き足していくように促した。グループワークの際は、筆者はファシリテーターとして、各作業の時間管理や対象者が発言する順番を決めたり、全員が均等に発言するように配慮した。また、必要と思われる機能とその理由について、説明が十分になされない場合は、その都度確認を取った。

以上のブレインストーミングを用いて得られた機能を「ヌスバウムのリスト」(2005: 92-95)の項目に分類した²。

4. 結果

生活に必要な機能を記入した付箋の合計枚数は235枚であった。「ヌスバウムのリスト」の各項目に分類した機能の回答数、回答率³、内容を表3に示す。以下、各項目に分類した機能について回答数が多いものを中心に説明する。なお、「ヌスバウムのリスト」の各項目の内容については表1を参照されたい。

(1) 生命

「生命」の回答数は12、回答率は5.1%であった。ここには生命を維持するための生理的に必要な機能が分類される。これは雇用形態にかかわらず、人間として必要な最も基本的なケイパビリティであり、また、絶対的貧困のある発展途上国では重要な視点であるが、日本のような先進国ではあがりづらい項目であったと考える。生命に分類できる機能は、「食事をする」、「料理をする」、「起きる」の3つがあげられた。「食事をする」や「料理をする」は、後述の身体的健康にも関連するが、今回は対象者が、空腹を満たすために必要な機能であるという生理的な理由を答えたため、「生命」に分類することが妥当と判断した。

(2) 身体的健康

次は回答率が最も高かった「身体的健康」である。回答数が50、回答率が21.3%であった。心身の疲れを取るために「寝る」が最も多く9名が必要であると回答した。他には「運動する」、清潔であるために「風呂に入る」などがあげられた。また「カラオケをする」、「おしゃべりする」など機能は様々だが、それを行う理由がストレス発散のためだという答えが9件あり、仕事でのストレスを意識的に発散させている様子が多く語られた。これはストレスを発散して心の健康を保つという理由であるため「身体的健康」に分類した。

(3) 身体的保全

「身体的保全」の回答数は9、回答率は3.8%であった。「電車に乗る」、「遊びに行く」など、物理的な移動に関するものが多くあがった。また、暴力を受けることのない「安全な環境で暮らす」という身体の安全に関する回答もあげられた。

(4) 感覚・想像力・思考

「感覚・想像力・思考」の回答数は19、回答率は8.1%であった。「本を読む」や「旅をする」などがあげられた。これらは、理由が異なれば別の項目に分類される可能性もあるが、知識を得ることが理由であったため本項目に分類することが妥当と判断した。また機能の内容は様々だが、その機能を行う理由が現実逃避という空想に関する回答が3件あった。日常生活において現実逃避をするための機能が必要という語りから、対象者たちが生活に

表3 未婚の女性非正規雇用者の生活に必要な機能

項目	回答数	回答率	内容	
1 生命	12	5.1%	食事をする (10) 料理をする 起きる	
2 身体的健康	50	21.3%	寝る (9) 運動する (7) 風呂に入る (6) 部屋の掃除をする (4) 何もしない時間を持つ (3) 洗濯する (2) カラオケをする (2) おしゃべりする (2) シャワーを浴びる 間食する 姿勢を保つ ジムに行く 健康に気をつける お酒を飲む 旅行に行く 感動して泣く 友達にあう 友達と食事をする	
3 身体的保全	9	3.8%	電車に乗る (3) 遊びに行く (2) 歩く (2) 外に出る 安全な環境で暮らす	
4 感覚・想像力・思考	19	8.1%	本を読む (7) 旅をする (3) 音楽を聞く (2) おいしいものを食べる (2) 勉強する 生理中を快適に過ごす 服を買う ライブに行く ささやかな贅沢をする	
5 感情	0	0.0%		
6 実践理性	29	12.3%	資格を取る (5) 貯金する (5) 勉強する (5) 習い事をする (4) 保険に入る (2) 社会福祉の制度を勉強する (2) ポリシーを持つ (2) 将来を考える (2) 一人暮らしをする 自分に何ができるか考える 自分で物事を決める 人生に余裕を持つ 就職活動する 遺書を書く 孤独死もありと想像する	
7 連帯	A	38	16.2%	恋人を得る (4) 人と話す (4) 友人と食事をする (3) メールをする (3) 人とつながっておく (3) 人脈を広げる (2) 結婚する (2) 家族と話す 家族を大切にす 人を好きになる 恋人と食事をする 友人と会う 恋人とスキンシップをとる ライブに行く 人と団らんする 電話をかける スマホを充電する 手紙を書く 恋人のために食事を作る 約束を守る 人にやさしくする 飲み会に行く 友人を作る ボランティア活動する
	B	9	3.8%	仕事をする (2) 服を買う・着る (2) お風呂に入る 自分を大切にす 勉強する 速足で歩く 税金を払う
8 自然との共生	0	0.0%		
9 遊び	26	11.1%	好きなことをする (5) 買い物をする (4) 旅行に行く (4) 外食する (2) 映画を見る (2) 趣味を持つ (2) ライブに行く (2) 遊ぶ (2) 音楽を聞く プロ野球を見る 恋人とおでかけする	
10 環境のコントロール	政治的	4	1.7%	社会運動をする 政治的な考えを発言をする 支持政党を応援する ロビイングする
	物質的	23	9.8%	働く (11) 貯金する 年金を払う 買物をする 保険を比較検討する
11 情報収集	16	6.8%	ネットを見る (5) テレビを見る (4) ニュースを見る (3) 新聞を読む (2) 人と話す (2)	

注：カッコ内の数字は回答した人数を示している。

不安を抱いている様子が伺えた。

(5) 感情

「感情」に該当する機能があがらなかったため、回答数は0となった。

(6) 実践理性

「実践理性」の回答数は29、回答率は12.3%であった。ヌスバウム (2005: 96-97) は、「実践理性」と次項で示す「連帯」は、「他の全ての項目を組織し覆うものであるため特別に重要であり、これらによって人は人間らしくなる」と述べ、これらの該当する機能を重要視している。今よりも条件の良い仕事に就くために「資格を取る」「勉強する」や、老後の備えなど将来を見据えて「貯金する」などが必要であると述べられた。また、「一人暮らし

しをする」「自分で物事を決める」という生活者の主体形成に関する内容もあげられた。

(7) 連帯

連帯には以下の2種類がある。

A) 他者と共に

この項目は、ヌスバウムによって定義名が付けられていないため、便宜上、「他者と共に」とした。回答数は38、回答率は16.2%であった。「身体的健康」に続き二番目に回答率が高い項目である。「恋人を得る」「人と話す」「友達と食事をする」など家族、友人、恋人との関係性の形成や継続に関すること、また、それらの人とコミュニケーションをとることに必要な機能が必要であると回答された。

B) 自尊心

この項目も、ヌスバウムによって定義名が付けられていないため、便宜上、「自尊心」とした。回答数は9、回答率は3.8%であった。社会の一員であるという感覚を保つために「仕事をする」ことが必要であるという回答や、他人に恥じることなく暮らすために、「服を買う・着る」、教養を身に着けるために「勉強する」などが必要であると回答された。

(8) 自然との共生

「自然との共生」に該当する機能があがらなかったため、回答数は0となった。

(9) 遊び

「遊び」の回答数は26、回答率は11.1%であった。「好きなことをする」「買い物をする」、「旅行に行く」、などの楽しむことを理由とする機能はこちらに分類した。

(10) 環境のコントロール

環境のコントロールには以下の2種類がある。

A) 政治的

回答数は4、回答率は1.7%であった。「社会運動をする」、「政治的な発言をする」、などがあげられた。これらは全て一人の対象者が回答したもので、日頃から意識的に社会的活動をしている人物であった。この発言を聞いても他の対象者から更に「選挙に投票に行く」など政治的な内容の機能が回答されることはなく、回答数が少ない結果となった。

B) 物質的

回答数は16、回答率は6.8%であった。収入を得るために「働く」という機能は全対象者が必要だと回答した。非正規雇用の職場での地位は周辺の位置づけである場合が多く、また政府統計結果からも女性非正規雇用者は低賃金である人が多いことが明らかになっているが、そのような女性非正規雇用にとっても働くという機能は、収入を得るために働くことは重要な機能であると認識されていることがわかる。また、「転職活動する」や転職するために「資格を取る」といった非正規雇用者に特有な機能も回答された。

(11) 情報収集

「情報収集」は、「ヌスバウムのリスト」にない項目である。「ネットを見る」、「テレビを見る」、「ニュースを見る」などの情報収集を理由とした機能が多く回答され、これらは「ヌスバウムのリスト」のいずれの項目にも当てはまらなると判断し、新たに「情報収集」という項目を追加した。ヌスバウムは、「リストは変更可能なものであり控えめなものである。それは常に挑戦を受け、新しく作り直されるものである」(ヌスバウム 2005: 91-92)としているため、現代の日本の状況に沿った11番目のケイバビリティとして「情報収集」を付け加えることにした。回答数は16、回答率は6.8%であった。

(12) 結果のまとめ

以上、女性の非正規雇用者の生活に必要な機能を、「ヌスバウムのリスト」に基づいて分類した結果、より多くの対象者が必要であると回答した機能を中心に要約すると、「収入を得るために働くこと」(環境のコントロール: 物質的)、「空腹を満たすために食事をする」(生命)、「心身の疲れをとるために寝ること」(身体的健康)、「様々な行動によりストレスを発散すること」(身体的健康)、「情報収集のためにネットを見ること」(情報収集)を生活する上で必要な機能であると考えていることが明らかになった。

5. 考察

「ヌスバウムのリスト」を分析基準とし、女性非正規雇用者の生活に必要な機能を選定した結果、以下の二点が明らかになった。一点目は、必要な機能の回答率は均一ではなく、0%から約20%の差があったということである。「身体的健康」や「連帯」に関する回答率が高かった一方で、「感情」、「自然との共生」回答率が0%であった。二点目は、ヌスバウムのリストには明示されていない情報収集に関する機能の重要性が明らかになったことである。

一点目の回答率に差があったことは何を意味するのであろうか。本稿の調査結果では、各ケイパビリティの回答率は均等ではなかった。最も回答率が高かったのが「身体的健康」の21.3%で、次に高かったのが「連帯（他者との共生）」で16.2%であった。一方、「感情」と「自然との共生」の回答率は0%であり、生活に必要とされている機能の内容に差があることが明らかになった。ヌスバウム（2000：95）は、「このリストはあくまでも個々の要素のリスト」であり「他の項目を犠牲にしてひとつの項目のみ発展させることは避けなければならない」と記し、偏りなく全ての項目が均等に充たされている状態が望ましいと述べている。対象者たちが生活に必要な機能を考えるブレインストーミングにおいて、「感情」や「自然との共生」に関する機能を思い浮かべることができなかつた、つまり回答率が0%であったということは、それらの機能が生活に必要であると認識できないということの表れであり、それらの機能の達成に困難を抱えていることを示しているのではないかと考えた。

以下、回答率が0%であった項目について考察する。はじめに「感情」の回答率が0%であった理由について、対象者たちは非正規雇用という立場で職場などの生活環境で感情を抑圧する機会が多く、それが今回の結果に表れているのではないかと考えた。ホックシールドR.（2000）は、サービス産業の発展に伴い、サービスを提供する労働者が顧客満足に努めるために、自らの感情を商品の一部として売らなければならないことを感情労働と呼んだ。職場には職業上適切な感情やその表出方法、または不適切な感情が定められた感情規則というものが存在し、職業上適切な感情状態を保つための感情管理が職務内容の一部となっているという。顧客だけでなく、同僚や上司に対しても感情管理は発生すると考えられ、このホックシールドの感情労働に関する指摘は、本調査対象者の非正規雇用者にも当てはまるのではないかと考えた。非正規雇用の多くは、昇進の機会がなく、正規雇用者と比較しても組織において周辺的な低い地位にいと想定される。対人関係において地位が低い状態が続くことは感情を抑圧することに繋がり、それが今回の調査結果の回答率0%に関連しているのではないかと考えた。また、11名中8名の対象者は同居者がおり、親、きょうだい、恋人と一緒に暮らしていた。人間関係資源を有しているにもかかわらず、その人達に対する感情表現に関する機能が一つも回答されなかつたことも、彼女たちが感情を表出することが困難を抱えており、精神的な余裕がないことの現れであるのかもしれない。

次に、「自然との共生」も回答率が0%であったが、仮に、「ペットを飼う」や「観葉植物を育てる」などの機能が回答されれば、それらは「自然との共生」に該当するであろう。しかし、身の回りにペットや植物がないとそれらを必要だと意識的に答えることが難しいと考える。ペットや植物などの生き物の飼育には、長期間、金銭や世話をする時間などの資源が必要となる。ペット総研（2016）によると、ペットオーナーを対象とした調査の結果、犬オーナーの86.1%は世帯年収が200万円以上であり、200万円以下は13.9%に留まる。また、アニコム損害保険会社（2017）がペット保険契約者に対して行った調査によると、犬にかかる費用は年間約45万円であるという。時事通信社（2007）によると、ペットを飼っていて困ることについて、19.2%が「面倒を見るのが大変」、12.9%が「病気の治療代等が高い」と答えたという。これらより日本でペットを飼える人物像として世帯年収200万円以上であり、年間約45万円の費用と世話にかかる時間に余裕がある人であるといえる。本稿の対象者は非正規雇用者であり、低収入・不安定な働き方をしている。「自然との共生」の回答率が0%であったことは、対象者たちの生活に、ペットや植物に金銭や時間などの資源を費やすほどの余裕がないことの現れなのかもしれないと考えた。また、仮にペットを飼っていたり植物を置いていたとしても回答率が0%ということは、「自然との共生」に関する機能が生活に必要だと認識できないほど生活に余裕がないことの現れであるのかもしれないとも考えられる。

結果の二点目である情報収集に関する機能の重要性について、近年、Facebook、Twitterなどソーシャルネットワークサービスの普及が進んでおり、インターネット上での情報収集の重要性が指摘できる。情報化社会の現代においていかに多くの情報を収集できるかは、生活の質を左右する重要な側面と考えられる。「ヌスパウムのリスト」に情報収集の項目を追加することは、情報化社会と呼ばれる現代日本において有効と考えられる。今後、情報収集を追加したリストを用いて、ケイパビリティの性別比較などにより新たな知見を得られると考えられる。

6. 今後の課題

最後に今後の課題を二点述べる。一点目の課題は、本稿の調査では、ブレンストーミング法を用いて未婚の女性非正規雇用者の生活に必要な機能の選定を行ったが、個々の機能の必要性の程度や実際に達成しているか否かについては明らかにできていない。よって、本稿で作成した未婚の女性正規雇用者の生活に必要な機能のリストを用いて、必要性が高いにもかかわらず達成できていない機能は何かを明らかにすることが今後の課題である。具体的には、表3に示した機能の必要性の程度と達成状況を確認するインタビュー調査を実施することを検討している。二点目の課題は、女性正規雇用者を比較対象として、雇用形態別の比較を行い、非正規雇用が人々の生活にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。

【註】

1. Williams and Windebank (2003) はイギリスの家事の機能について、後藤等 (2004) は日本の子育て世帯の機能に関する研究であった。調査では対象者の生活に適用した機能で構成されるケイパビリティのリストを用いるべきであるため、本稿の研究対象者である女性非正規雇用者にWilliams and Windebank (2003) や後藤等 (2004) のリストは利用できない。
2. 回答をどの項目に分類するのが妥当かの判断は、筆者を含むCAについて知識を有する複数名で議論し、合意の上、分類した。
3. 各項目に分類された機能数を合計数で割ったものを回答率とする。

【引用文献】

- 天野寛子・粕谷美砂子 (2008) 『男女共同参画時代の女性農業者と家族』ドメス出版
- 石田好江 (2014) 「生活経営学におけるケイパビリティ・アプローチの可能性」『生活経営学研究』49, 3-9
- 汲田千賀子 (2012) 「常勤職員が求める非常勤職員像—介護福祉現場の雇用の多様化をめぐる—」『介護福祉学』19(2), 166-173
- オズボーン,アレックス (2008) 『創造力を生かす—アイデアを得る38の方法 (新装版)』(豊田晃訳) 創元社
- 後藤玲子・阿部彩・橋本俊詔・八田達夫・埋橋孝文・菊池馨実・勝又幸子 (2004) 「現代日本において何が<必要>か?—『福祉に関する意識調査』の分析と考察—」『季刊・社会保障研究』39, 389-402
- 重川純子・久保桂子 (2014) 「生活経営学におけるケイパビリティ・アプローチ—生活主体が生活経営力を高めるために—」『生活経営学研究』49, 20-23
- セン, アマルティア (1999) 『不平等の再検討—潜在能力と自由』(池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳) 岩波書店
- セン, アマルティア (2006) 「潜在能力と福祉」ヌスパウム, マーサ・セン, アマルティア編『クオリティー・オブ・ライフ—豊かさの本質とは—』(竹友安彦監修・水谷めぐみ訳), 里文出版, 59-96
- 中野麻美 (2007) 「非正規労働者の権利と現状の課題」『女性労働研究』51, 53-59
- 西垣里史・西村めぐみ・谷畑千栄子 (2014) 「ブレンストーミングを使っの事例検討の報告—訪問看護ステーション研修会の実践から—」『関西看護医療大学紀要』6(1), 60-65
- ヌスパウム, マーサ (2005) 『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』(池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳) 岩波書店
- ホックシールド, R (2000) 『管理される心—感情が商品になるとき—』(石井准, 室伏重季訳) 世界思想社
- Alkire, Sand Rufus, B. (1997) "A Practical Reasoning Theory of Development Ethics: Furthering the Capabilities Approach." *Journal of International Development* 9(2): 263-279.
- Erikson, R. and Rune, A. (1987) "Welfare in Transition". A Survey of Living Conditions in Sweden 1968-1981. Oxford: Clarendon Press.
- Sen, A. (2004). "Dialogue: Capabilities, Lists, and Public Reason: Continuing the Conversation." *Feminist Economics* 10(3): 77-80.
- Robeyns, I. (2003) "Sen's Capability Approach and Gender Inequality: Selecting Relevant Capabilities". *Feminist Economics* 9(2-3): 61-92.
- Williams, C and Windebank, J. (2003) "Poverty and the Third Way". London: Routledge.

山本 女性非正規雇用者の生活実態を探る

- アニコム損害保険会社. 「毎年恒例！ペットにかかる年間支出調査（2017年）」. (https://www.anicom-sompo.co.jp/news/2017/news_0180315.html) 2019/08/12.
- 時事通信社. 「ペットに関する世論調査」. (<http://www.crs.or.jp/backno/old/No596/5962.htm>) 2019/08/12
- 総務省統計局「労働力調査（詳細集計）平成29年度平均（速報）結果の概要」(<http://www.stat.go.jp/data/roudou/rireki/nen/dt/pdf/2017.pdf>) 2019/7/26.
- 内閣府. 「国民生活に関する世論調査」(<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-life/zh/z21-1.html>) 2019/7/26.
- ペット総研. 「アンケート調査結果：ペットオーナーのライフスタイル」(<https://www.petoffice.co.jp/world/article.html?id=n2016010901>) 2019/08/12.